

# 「XがYにZを感じる」構文に関する一考察<sup>1</sup>

— 「に」格の格解釈のゆらぎを中心に—

鄭 若曦

ruoxi\_zheng@bfsu.edu.cn

キーワード：に格 属性の持ち主 心的態度の対象 格解釈のゆらぎ

## 要旨

本研究では、「XがYにZを感じる」構文における「に」格を取り上げ、「に」格の意味がもつばら「心的態度の対象」として解釈される場合もあれば、「属性の持ち主」としても解釈できる場合があることに注目し、「に」の格解釈のゆらぎの実態を明らかにした。また、このような格解釈のゆらぎの背後にある仕組みも解明してみた。そこから、格解釈のゆらぎという現象は、従来見落とされがちであったが、「に」格の持つ諸意味の関係をとらえる際にも、構文の意味を考える際にも、重要な切り口であることが分かった。

## 1. はじめに

日本語の「に」格は、もともと多義的な格助詞として知られており、これまで「に」格の意味分類に注目した研究、ひいてはそこから「に」格の意味の統一的説明を目指した研究が多数行われてきた（鈴木 1972、国広 1962, 1986、奥田 1983、堀川 1988、益岡・田窪 1992、菅井 2007等）。しかし、実例を見てみると、「に」格の意味がはっきりと一つに定まる場合もあれば、格解釈にゆらぎが起こる場合も多数存在することがわかる。このことは、意味役割の本質を捉える上でも、構文の意味を考える上でも重要な意味を持つが、これまでこのような格解釈のゆらぎに注目した研究は稀である。

上記のような格解釈のゆらぎの一つの表れとして、本研究では以下のような「XがYにZを感じる<sup>2</sup>」構文における「に」格を取り上げる。

- (1) 彼は今回の事件に疑問を感じているようです。
- (2) 多くの若者が将来に不安を感じています。
- (3) 私は彼の作品に魅力を感じます。

例 (1) の「今回の事件に疑問を感じる」の「に」格は、もつばら「疑問」という心的態度の

<sup>1</sup> この研究は「2018年度中央高校基本科学研究費専項資金資助項目（2018JJ010）」の助成を受けている。また、本論文の執筆に際し、西村義樹先生をはじめ、東京大学言語学研究室の多数の方から論文の内容について貴重なご助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

<sup>2</sup> ほかに、述語動詞が「覚える」「感じ取る」「見出す」などの場合に「に」格の格解釈のゆらぎがある程度見られるが、使用域はいずれも「感じる」ほど広くない。そのため、今回は最も使用域が広い「感じる」に研究対象を限定する。

対象だと言って問題ないと思われるが、例 (2) の「将来に不安を感じる」と例 (3) の「彼の作品に魅力を感じる」における「に」格の意味を複数の日本語話者に確認したところ、「心的態度の対象」としとらえることはもちろん可能だが、「属性の持ち主」として解釈することもできなくはないという反応が比較的多かった。つまり、例 (2) (3) は、「将来」に「不安（を引き起こす力）」があると感じる、「彼の作品」に「魅力」があると感じる、と解釈することもできるといふことだ。

このように、「XがYにZを感じる」構文における「に」格は、例 (1) のようにもつばら「心的態度の対象」として解釈される場合もあれば、例 (2) (3) のように「心的態度の対象」と「属性の持ち主」の両方の解釈が可能な場合もあると言えよう。実際、今回調査した「XがYにZを感じる」構文の用例において、このような格解釈のゆらぎが見られるものは広範に存在しており、決して周延的な例ではない。よって、このことは、「に」格の意味が必ずどれか一つに分類できるという前提のもとで議論を進めてきた多くの先行研究に疑問を呈するものであると言えよう。

以上のことから、本研究では、「XがYにZを感じる」構文における「に」格の格解釈の問題を一つの切り口として、新たな視点から「に」格の意味分析の問題に迫りたい。具体的には、まず第2節で「に」格の意味を扱った先行研究を振り返り、特に山梨（1987, 1989, 1993, 1994）の一連の研究を踏まえた上で、第3節では「XがYにZを感じる」構文をX・Y・Z三者の関係によって三つのタイプに分類し、それぞれのタイプにおいて「に」格の格解釈のゆらぎが見られるかを明らかにする。また、格解釈のゆらぎの背後にある仕組みについても可能な説を提供する。

## 2. 「に」格の意味に関する先行研究

本研究の研究対象である「XがYにZを感じる」構文における「に」格の意味に直接触れた先行研究はまだないが、「に」格の格解釈の問題を分析するにあたって、以下の研究を踏まえる必要があると思われる。

まずは、「に」格の意味分類に関する研究である。日本語の格助詞の中で、「に」格は最も意味が豊富であり、いくつの意味を設定したらよいかに関して未だに一致した見解が見られていないようである。例えば、益岡・田窪（1992）では、「格助詞の基本的用法」として、「に」について「具体物・抽象物の存在位置」「所有者」「動作や事態の時・順序」「動作主」「着点」「変化の結果」「受け取り手・受益者」「相手」「対象」「目的」「原因」の11種の意味を挙げている。そのほかにも、鈴木（1972）では「に」格に8種類の意味、菅井（2007）では「に」格に14の意味を認めている。ただし、これらの研究は「に」格にいくつの意味を認めるかに関しては異なるが、「に」でマークされた名詞句の意味が必ずどれか一つに分類できるという前提に立っているという点では共通しており、「に」格の格解釈にゆらぎが生じる場合について触れた研究は、後に述べる山梨の研究以外に存在しない。

次に、「に」格の持つ多様な意味どうしの関係を論じた研究である。「に」格の持つ諸意味の

中には、意味拡張の仕組みが比較的単純なものもあれば（例えば、メタファー的拡張に基づくもの）、簡単に意味間の繋がりが見えてこないものもある。後者に関しても、他の「に」の用法と統一的なスキーマが抽出できると主張する研究が少なくない。例えば、堀川（1988）と竹林（2007）はいずれも国広（1962, 1986）を承け、「に」を「密着の対象」として統一的にとらえようとした。森山（2005）と菅井（2007）はそれぞれ「が格に対する対峙性」と「一体化」という概念で「に」格に対して統一的説明を試みた。これらの研究は、なぜこれだけ多様な意味を「に」という一つの助詞が担いうるのかに関して、可能な説を提示していると言えるが、スキーマの抽出にいささか強引なところもあると言えよう。

いずれにせよ、上記の研究のほとんどは、「に」格の表す意味は必ずどれか一つに分類できるという考えのもとで議論を進めており、本研究が取り上げる「に」格の意味のように、「心的態度の対象」と「属性の持ち主」の間で格解釈のゆらぎが見られ、且つ両者の意味関係が簡単に見えてこないようなケースは、これまでほとんど研究対象として取り上げられてこなかったのである。

本研究が調べた限り、唯一正面から日本語の格解釈のゆらぎの問題を取り上げたのは、山梨（1987, 1989, 1993, 1994）の一連の研究であり、注目に値する。

山梨氏は、従来の「深層格」の観点から行われた格規定によっては予測できない例が広範に存在すると指摘し、「認知格」という新たな観点から格の意味規定を行うべきだと主張している。具体的には、従来の「深層格」の枠組みで行われた意味規定では、格は外部世界の事実関係または真理条件に基づくものであり、それぞれの格はカテゴリー化された単一の意味役割として認定されることを前提としている。しかし、これでは下記の例（4） - （6）<sup>3</sup>のように格の役割が一律に決定できない場合を説明できない。それに対して、山梨（1994 : 102）によれば、「認知格」の枠組みで行われた意味規定では、問題の名詞にはカテゴリー化された格の役割が唯一的に与えられるのではなく、その表現を解釈する主体の視点のとりかたや文脈によって複数の格解釈がファジィな形で投影されることが可能であり、したがって、格の意味役割は一つ一つが範疇として独立しているのではなく、それぞれの格役割の機能が複合的にオーバーラップした形で相対的に関連づけられるとされている。よって、このような「認知格」の観点から見れば、例（4） - （6）のように複数の意味役割にまたがるケースが広範に存在することは、何も不思議なことではなく、むしろ人間の認知のありかたをダイナミックに反映していると言えよう。

(4) <様態—結果格的>

- a. 鯛を三枚におろす。
- b. トウモロコシを粉にひく。

(5) <対象—原因格的>

- a. 突然の訃報に泣き崩れる。
- b. 部長の文句にうんざりする。

<sup>3</sup> 例（4） - （6）はすべて山梨（1994）からの引用である。

(6) <原因一場所格的>

- a. 庭の松が小雨に濡れている。
- b. テントの幕は大きい音をたてて風にはためき…吹きはがされそうになりました。

このように、山梨の一連の研究によって、格の意味を考える際に格解釈のゆらぎという視点がいかに重要な意味を持つかが明らかとなった。ただし、山梨の研究では、本研究の研究対象である「XがYにZを感じる」構文における「に」格を取り上げていない。また、格解釈のゆらぎの背後にある仕組みについてもほとんど触れていない。本研究では山梨の一連の研究を理論的枠組みとし、「XがYにZを感じる」構文における「に」の格解釈のゆらぎの実態を明らかにし、その背後にある原理を解明することを目指す。

3. 「XがYにZを感じる」構文に見られる「に」の格解釈のゆらぎ

本研究では、「XがYにZを感じる」構文における「に」格の意味を分析するにあたって、まず検索ツール中納言を用いて、BCCWJ コーパス（日本語現代語書き言葉均衡コーパス）において「XがYにZを感じる」構文に該当する用例を670例集めた<sup>4</sup>。

次に、「XのZ」「YのZ」という二つの表現が成立するかによって、「XがYにZを感じる」構文を三つのタイプに分けた。なぜこのようなテストを行ったかと言うと、のちの考察でも分かるように、この構文におけるX・Y・Z三者の関係はかなり混質的であり（具体的には、ZがXのものとして解釈されるか、Yのものとして解釈されるか、または両方のものとして解釈されるかでばらつきがあり）、それが「に」格の意味解釈に大きな影響を与えるからである。

表 1. 本研究における「XがYにZを感じる」構文の分類

	「XのZ」 が言えるか	「YのZ」 が言えるか	代表例
A類	○	×	例(1) 彼の疑問
B類	○	○	例(2) 多くの若者の不安 将来の不安
C類	×	○	例(3) 彼の作品の魅力

具体的に見ていくと、まず例(1)の場合、「彼の疑問」は言えるが、「この事件の疑問」という表現は成り立たない。このように、「XのZ」は成立するが、「YのZ」は成立しない用例をA類とする。次に例(2)の場合、「多くの若者の不安」という表現も「将来の不安」という表現もどちらも成立する。このように、「XのZ」も「YのZ」もどちらも成立する用例をB類とする。最後に例(3)の場合、「彼の作品の魅力」という表現は成立するが、「私の魅力」はもと

<sup>4</sup> 具体的には、「名詞+語彙素“に”+名詞+2語以内に語彙素“を”+語彙素“感ずる”」で検索をかけ、ノイズを除去した結果915例の用例が残った。そのうち、Zの出現頻度が3以上のもの670例を今回の分析対象としている。ここで注意が必要なのは、今回ノイズとして除去した例の中には、「私は腰に痛みを感じる」のようにYが身体部位で、Zが身体感覚を表すものがかなり多く見られたが、本研究で取り扱う「XがYにZを感じる」構文の「に」格とは異質であるため、現段階では取り扱わないことにする。

の文の意味とずれているため成立しない<sup>5</sup>。このように、「YのZ」は成立するが、「XのZ」は成立しないを用例をC類とする。

以下、3.1節から3.3節まで、三つのタイプにおける「に」格の意味を具体的に見ていきたい。

### 3.1. A類

A類は、前述したように、「XのZ」は成立するが、「YのZ」は成立しないものが該当し、全体の半数以上を占めている。A類におけるZを具体的に見てみると、例(1)(7)のように、「疑問」が最もよく見られるが、ほかにも例(8)-(12)が示すように、「抵抗」「違和感」「不満」「親しみ」「怒り」「誇り」「戸惑い」などが代表的であり<sup>6</sup>、すべて感情態度を表すものである。

(7) 元同僚のトグサはこの事故に疑問を感じ、捜査を開始、そしてある視聴覚デバイスが警察内部で不正使用されていることを突き詰める。  
(このアニメはすごい!)

(8) 千鶴子は、最初は信心の話に抵抗を感じていたが、「願いは絶対に叶う」との茂原の確信ある話に心を打たれ、入会を決意したのである。  
(新・人間革命)

(9) 生徒と同様に先生も事実でないことを公表することに違和感を感じていらっしやるんですね。  
(学校心理士の実践)

(10) ほとんどのお客さまは、商品やサービスに不満を感じても何も言いません。  
(心を動かす電話の応対)

(11) けれども人間が何かに親しみを感じたり、ある作家に親しみを感じたりすることには、ちょっとした偶然からもあるように思います。  
(中野重治は語る)

(12) 友布子さんはそんな両親に怒りを感じたものの、わが子とわが親を天秤にかけると、どうしても親の方が重くなってしまふ。  
(ブードゥー・チャイⅡ)

さて、このタイプは、「XのZ」は成立するが、「YのZ」は成立しないということから分かるように、Zはもっぱら主語Xの側の感情態度で、Yの属性としてとらえることはできないと分かる。よって、「に」でマークされたYは、A類においてはもっぱらXの「心的態度(Z)の対象」として解釈される。

### 3.2. B類

B類は、前述したように、「XのZ」と「YのZ」が両方成立する用例が該当し、全体の2割近くを占めている。B類におけるZを具体的に見てみると、例(2)(13)の「不安」が最もよく見られるが、ほかにも例(14)(15)が示すように、「喜び」「幸せ」「絶望」などが代表的であ

<sup>5</sup> 「私の魅力」という表現自体は日本語として自然だが、例(3)の「私は彼の作品に魅力を感じます」は私に魅力があるかどうかを問題にしていないため、「私の魅力」はもとの文の意味とずれている。このような基準で、「私の魅力」は成立しないと判断しているわけである。それに対して、例(2)の「多くの若者が将来に不安を感じています」は、「多くの若者の不安」「将来の不安」の両方を問題にしていると見ることができると、両方成立すると判断したわけである。

<sup>6</sup> ほかに、A類によく見られるZとして、「憤り」「反発」「負い目」「興味」「驚き」「愛着」「苛立ち」「嫌悪」「恐れ」「罪悪感」「嫉妬」「興奮」「引け目」などが挙げられる。

り、これらもすべて感情態度を表すものである。

(13) 中国では都市部だけでなく、農村部においても失業者が増加しており、将来に不安を感じている人々が個人預金を増加させている。 (人民元と中国経済)

(14) 部下は...上司に認めて貰うことに喜びを感じるものです。(権限のない社員が会社を変える)

(15) 暁を通じて、改めてすてきな人と縁があることに幸せを感じています。

(医療ケアハンドブック)

さて、このタイプは「XのZ」と「YのZ」が両方成立するため、ZをXの側のものとしても、Yの側のものとしても解釈できると言える。すなわち、YをXの「心的態度(Z)の対象」としてとらえることも、「属性(Z)の持ち主」としてとらえることもできるということだ。さて、なぜこのタイプに、「に」の格解釈のゆらぎが起こりうるのか。これは、例(13)(14)を例(16)(17)と比較すれば一目瞭然である。

(16) この春以来のパークスの対日政策に不安を感じた西郷は、イギリス側の「意底」をただすべく、サトウを挑発してみたところ、サトウがうまくそれに乗ってくれたのはよいが…。

(外国交際)

(17) ロサリアは、夫が再起していく姿には喜びを感じていた。

(新・人間革命)

例(16)(17)も例(13)(14)と同様、Zが「不安」「喜び」となっているが、「パークスの対日政策の不安」「夫が再起していく姿の喜び」という表現は成り立たない。よって、例(16)(17)は「YのZ」が成立せず、A類に属する。さて、例(13)(14)と例(16)(17)の違いはどこにあるのか。

本研究では、Yに接する際にZという感情態度を持つことが、Xだけでなく、多数の人の間で共有されている経験かどうかで、例(13)(14)と例(16)(17)が異なると考える。つまり、例(16)(17)の「パークスの対日政策」「夫が再起していく姿」に「不安」「喜び」の感情態度を抱くかは、個人の判断による揺れがかなり大きいと思われるが、「将来」「上司に認めて貰うこと」に「不安」「喜び」の感情態度を抱くことは多くの人の間で共有されている経験である。そこに、「将来」「上司に認めて貰うこと」から属性として「不安(を引き起こす力)」「喜び(を引き起こす力)」を見出す余地が出てくるのではないかと考える。すなわち、本田(1997)で言う「観察点の公共性」が高い場合に、Yに対する感情態度ZをYの属性として解釈できる可能性が高くなるのだと思われる。

このように、一口に感情態度を表すZと言っても、「に」格がもつばら「心的態度の対象」として解釈される場合(すなわち、A類に属する場合)もあれば、「心的態度の対象」と「属性の持ち主」との間で格解釈のゆらぎが起こる場合(すなわち、B類に属する場合)もあり、さらにそこには観察点の公共性(すなわち、Yに対して感情態度Zを持つことが多くの人の間で共有されている経験かどうか)という問題がかかわっていることが分かった<sup>7</sup>。

<sup>7</sup> この分析は、実は佐藤(1987)の「さびしい道」についての分析と同じ趣旨のものである。佐藤(1987:74-75)



### 3.3. C 類

C 類は、前述したように、「Y の Z」は成立するが、「X の Z」は成立しないものが該当し、全用例の 3 割近くを占めている。C 類における Z を具体的に見てみると、例 (3) (18) の「魅力」のように Y の良さを表すものが最も多く見られ、ほかにも例 (19) (20) のように Y の問題点を表すもの（矛盾、問題など）、例 (21) (22) のように Y の価値を表すもの（やりがい、意味など）、例 (23) (24) のように Y の難易度を表すもの（困難、限界、手応えなど）がある。

(18) 今まで園芸には興味がなかったけれど、盆栽の姿に魅力を感じ、初めて何かを買ってみたという人も少なからずいます。 (盆栽は楽しい)

(19) おまけに、問題によってはアメリカの現在の政策に矛盾を感じている外国人学生も多いと思う。 (ハーバードで語られる世界戦略)

(20) 実は、私は、BSE 発生時、どうしてこういうことが起こったのかと、危機管理意識の希薄さに問題を感じました。 (国会会議録)

(21) 女性の雇用機会が拡大し、女性も働くことにやりがいを感じられるような仕事をする機会は増加しており、女性の就労意欲は増大して実際に働く女性も増えている。 (国民生活白書)

(22) 力への意志だけで動けば、社会的に成功して失敗しても、自分の人生に意味が感じられない。 (苦くても意味のある人生)

(23) やがて、体力が必要とされる通訳の仕事に限界を感じて、少しずつ縮小し、翻訳に重点を置くようになった。 (わたしのボスはわたし)

(24) 四十%以上の医師が悪い知らせを伝えることに困難を感じており、これが双方向での円滑な情報交換の障壁のひとつになって患者さんの疑問や誤解を誘う温床となっていることも否めません。 (国民は医療になにを求めているか)

さて、このタイプは「Y の Z」は成立するが、「X の Z」は成立しないということから分かるように、Z を Y の属性として解釈することはできるが、主語 X 側のものとしては考えにくいと言えよう。しかし、C 類の「に」格の意味を母語話者に確認したところ、意外なことに、「に」によってマークされた Y は「心的態度の対象」として解釈されることも可能だと分かった。すなわち、C 類のほとんどの例に「に」格の格解釈のゆらぎが見られるということである。さて、C 類における「に」格はなぜこのような格解釈のゆらぎが起りうるのだろうか。

本研究では、これは、この類における Z は確かに Y の持つ属性であるが、色・形状・重さのように誰から見てもそうと判断できるような客観的属性ではなく、Y と積極的にかかわるなかではじめて認知できる属性だからだと考える。例えば、例 (18) の場合、盆栽の姿が魅力的かどうかは、盆栽に積極的にかかわってみて（例えば、じっくり見たり、触ったり、それについて勉強したりして）はじめてそこから魅力的だと思えるものを見出せるのだと言えよう。同様

---

によれば、「石だたみの道」「長い道」「暗い道」などは個人の経験と関係なく決まってくるので、明らかに道の属性と感ぜられるが、「さびしい」は普通道の属性とは考えにくい。しかし、誰にとってもさびしいものであれば、道自体に「さびしさを我々に与える」という属性を持っていると読み替えることが可能になってくる。篠原 (2002) も同様の観点から、英語の sad を含む一部の形容詞文の振る舞いを分析している。

に、アメリカの現在の政策に矛盾するところがあるか、働くことにやりがいがあるか、悪い知らせを患者に知らせることが困難かなども簡単には判断できることではなく、実際に考えたり、体験したりすることで、はじめて Y にそのような属性が見出せるかが判断できるようになる。すなわち、C 類における Y は、このような探索活動を前提とした認知活動の対象だと考えることができよう。このような意味で、Y を「心的態度の対象」として解釈する余地が出てきたのだと思われる。

このように考えると、なぜこの構文に「X が Y に赤さを感じる」「X が Y に重さを感じる」のような表現が見られないのかも説明がつく。これは、色・形状・重さといった属性は一般的知識として共有されていることが多く、また人の判断によるばらつきもほとんど見られないため、わざわざ探索活動を通してその属性を見出したことを明示する必要がないためだと思われる。

このように、C 類において、Z はもっぱら Y の持つ属性であるが、そのような属性を見出すためには X が Y に対して積極的に探索活動を行う必要があるため、そこに Y を「心的態度の対象」としてとらえる余地が出てきたのだと言える。

以上、3.1 節から 3.3 節まで、「X が Y に Z を感じる」構文を三つのタイプにわけ、主に「に」格の格解釈の観点から、三つのタイプを考察してきた。また、格解釈にゆらぎが見られる場合、その背後にある仕組みも分析してみた。ここでは、「X が Y に Z を感じる」構文全体の意味も含めて、ここまでの分析を整理しなおすことにする。

ここまでの分析から分かるように、三つのタイプのいずれにおいても、母語話者は「に」でマークされた Y を「心的態度の対象」として解釈できる。よって、この構文は、まず「X が Y に対して何かの心的態度を向けた」という意味を持っていると言えよう。ただし、Y にどのような心的態度を向けるかに関して、A 類と B 類ははっきりとその心的態度が Z であることを明示しているが、C 類ではその心的態度が明示されていなく、Y から属性 Z を見出すための何かの探索活動であると言えない。この意味で、A 類と B 類と比べて、C 類はやや周延的であると言える。

一方、B 類と C 類の分析から、この構文は「X が Y において Z という属性を見出した」という意味も持っていることが分かった。ただし、C 類の Z は常に Y の属性として解釈されるが、B 類の Z はそれ自体 X の感情態度であり、多くの人が Y にその感情を抱いているときに（すなわち、観察点の公共性が高いときに）はじめて、Z は Y の属性として認識される。この意味で、C 類と比べて、B 類はやや周延的であると言える。

このように、「X が Y に Z を感じる」構文においては、「X が Y に対して何かの心的態度を向けた」という意味と、「X が Y において Z という属性を見出した」という二つの意味が複雑に絡み合っていることがわかる。図式化すると、以下の図 1 のようになる。



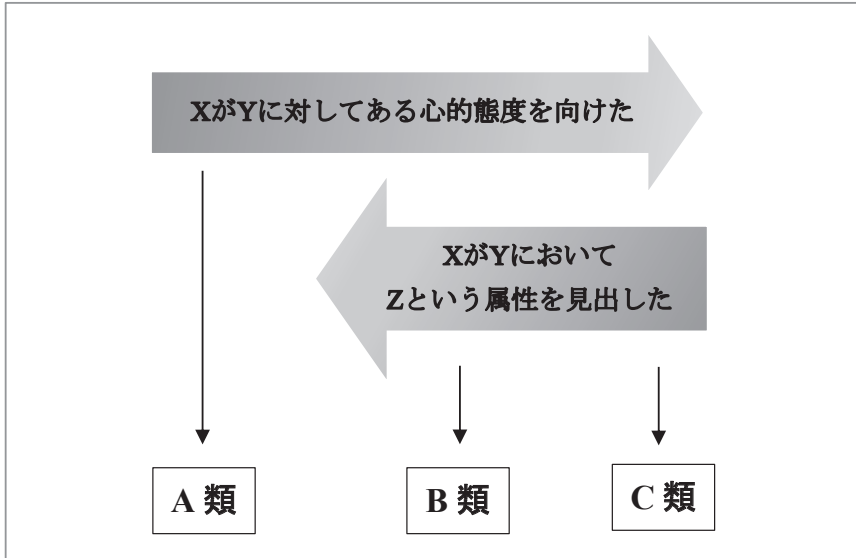


図1. 「XがYにZを感じる」構文の意味の二面性

このような意味の二面性を一つの構文が併せ持ち、また「に」格に「心的態度の対象」と「属性の持ち主」という二つの格解釈が可能なのは、突き詰めれば、我々の百科事典的知識の中でこの二つのことが一種のゲシュタルトをなしているためだと考える。すなわち、あるものにおいてある属性を見出すことと、そのものに対してある種の心的態度を持つことは、よく連動して起こるがために、言語表現上も、このことが格解釈のゆらぎ、または構文の意味の二面性という形で現れているのだと言えよう<sup>8</sup>。

#### 4. まとめ

本研究では「XがYにZを感じる」構文における「に」格の意味に焦点を当て、そこに見られる「に」格の格解釈のゆらぎの実態を明らかにした。そこから、格解釈のゆらぎという現象は、「に」格をはじめとする格助詞の意味分析をする際にも、構文の意味分析をする際にも有用であると分かったが、これまでの研究ではこのような現象はほとんど見落とされていたと言ってよい。よって、今後は引き続き格解釈のゆらぎという視点から日本語の「に」格をはじめとする他の格助詞の意味分析をしていきたい。また、今回は紙面の都合上、他の言語との比較対照を行うことができなかったが、格解釈のゆらぎという現象が根本的に我々の百科事典的知識に基づくのであれば、他の言語でも似たような現象が見られるかもしれない。今後はこのような対照言語学の視点も視野に入れつつ考察を進めていきたい。

<sup>8</sup> 篠原 (2002) は、「私は別れがさびしい」と発話するとき、その「さびしさ」は我々の心の中に存在するのか、それとも別れ自体に人をさびしがらせる性質が本来備わっていて我々にそういう感情を引き起こさせたのか、という分析をしているが、まさに本研究の主張と同一の趣旨のものだと言えよう。

## 参考文献

- 奥田靖雄（1983）「に格の名詞と動詞のくみあわせ」言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』：281-324. 東京：むぎ書房.
- 菅井三実（2007）「格助詞『に』の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」『世界の日本語教育』17: 113-135.
- 国広哲弥（1962）「日本語格助詞の意義素試論」『島根大学論集（人文科学）』12: 215-234.
- 国広哲弥（1986）「意味論入門」『言語』15(12): 194-202.
- 佐藤信夫（1987）『レトリックの消息』東京：白水社.
- 篠原俊吾（2002）『「悲しさ」「さびしさ」はどこにあるのか—形容詞文の事態把握とその中核をめぐる—』西村義樹（編）『認知言語学Ⅰ：事象構造』東京：東京大学出版会.
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』東京：むぎ書房.
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』東京：くろしお出版.
- 竹林一志（2007）『「を」「に」の謎を解く』東京：笠間書院.
- 堀川智也（1988）「格助詞『に』の意味についての一考察」『東京大学言語学論集』88: 321-333.
- 本多啓（1997）「英語主体移動表現，中間構文，知覚動詞について—生態心理学の視点から」『駿河台大学論叢』15.
- 森山新（2005）「格助詞にの意味構造についての認知言語学的考察」『日本認知言語学会論文集』5: 1-11.
- 山梨正明（1987）「深層格の核と周辺—日本語の格助詞からの一考察」『言語学の視界』：59-72. 東京：大学書林.
- 山梨正明（1989）「言語の認知と意味の計算（I-II）」『数理計算』309: 18-22, 310: 78-83.
- 山梨正明（1993）「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」仁田義雄（編）『日本語の格をめぐる』：39-65. 東京：くろしお出版.
- 山梨正明（1994）「連載：日常言語の認知格モデル(1)-(12)」『言語』23(1-12).

# An Analysis of the ‘*X-ga Y-ni Z-wo kanjiru*’ Construction: When and Why Y Lends Itself to More Than One Interpretation

Ruoxi Zheng

ruoxi\_zheng@bfsu.edu.cn

**Keywords:** *ni*-marked noun phrase, possessor of an attribute, object of a mental attitude,  
indeterminacy of case interpretation

## Abstract

This paper investigates the mechanism behind the interpretation of the *ni*-marked noun phrase in the ‘*X-ga Y-ni Z-wo kanjiru*’ construction in Japanese. A careful analysis of data obtained from the BCCWJ shows that while some instances of this nominal clearly designate the object of a mental attitude, others can be readily interpreted as the possessor of an attribute as well. This illustrates a phenomenon that has received little attention, one where a nominal marked by a particular case particle in a construction is subject to more than one interpretation. It is argued that the analysis presented in this paper provides insight into the semantics of the case particle *ni* as well as that of the construction as a whole.

(てい・じゃくぎ 北京外国語大学)